

A close-up photograph of a small, green bird with a white eye-ring perched on a thin branch. The bird is facing right, looking towards a sliced orange. The orange is cut in half, and a small, dark stick is inserted into its center. The background is blurred, showing more green leaves and branches.

八丈島と三根と私達！

第 37 回八丈島三根会開催日発行

秋宵感懷 ― 南海タイムスと三根会

関西外国語大学教授 菊池清明

南海タイムスと三根会に関する私事を少し綴ってみたい。本紙との関わりは、ちょうどわたしが大学院博士課程を修了して、最初に奉職した国立愛媛大学に着任した一九八二年に遡る。もう三六年前になる。

その夏から三カ月、イギリス、フランス、イタリアで研修することになっていた。出発前、古い歴史を誇る南海タイムス社をお訪ねした。わたしのヨーロッパ外遊に関心を示された先代社長に、旅行中の見聞、印象などを書いてほしいと頼まれ、「ヨーロッパの事」と題して同年、三回にわたって本紙に寄稿した。一九九八年には、「春宵感懷」と題して、高校進学のため上京した時のフリージアに纏わる寸感を綴った。

ただ、これらの寄稿は、それだけには終わらないのである。都心のホテルで開催される三根出身の会合である三根会にはほぼ毎年、出席して、二〇名近い同級生と旧交を温めている。時には三〇〇人の参加者を超えることもあるこの会は、同級生の枠を超えて、ひろく故郷八大島での幼少時、中学時代の思い出を共有し、暖かく育む場でもある。

本紙に寄稿したフリージアに纏わる一文には、孟春、少女の面影をまだ残す女子高生が落涙しながらフリージアの一束をもって八大空港のロビーで友人や家族と別れる光景を偶然目にしたわたしが、同じようにフリージアを抱えて椿丸で上京した遠い昔の自分の姿とを重ね合わせ、その感懷を記したものである。

そしてその一文が掲載された翌年に開催された三根会で手続きをしている時、受付の方に、「南海タイムスにフリージアの文章を書いた方ですか」と声をかけられた。そうですと答えると、その方が「あなたに会いたいという方がいます」といって、一人の女性の方を連れてこられた。その方は、わたしを見るなり嗚咽して、「あの記事には泣きましたよ、八大を離れた人は、あの記事に書かれたのと同じ思い出がありますよね。私も高卒業して、フリージアを抱きかかえ、泣きながら上京しました」と。その方はその後、わたしの寄稿文に思いを重ねたという数名の方を連れてきて、しばし、みなさん、それぞれのフリージアと上京の思い出について堰を切ったように語り始めた。

本紙は、人口一万にも満たない小さな島を故郷に持つ人たちが、島を離れようと、何処にいようと、このように、わたしたちの心を郷里と強く結

びつける役割を果たしている。紙面に広がる、地元に根差した記事が、島を離れたひとたちのところに心地よい郷愁を、静かに、やさしく、長きにわたって呼び起こしている。

三根会もしかり。三根会に集えば、懐かしい恩師や年配の方々の尊顔を拝するだけで、過ぎ去った思い出が溢れ出る。時折、耳に響く、上品な島言葉も、今は亡き、祖父母を、両親兄弟を、早逝した友を思い起こしてくる縁となるのである。

浜風が幾分北より吹き始め、島の夏も終わろうかと思いを遙かにしながら、今宵も、南海タイムスに目を通してながら、本紙と三根会の存在が年を重ねるごとにかけがえのない、大切なものになっていくことを実感するのは、わたしだけではなないように思える。

望郷の念が本紙の一文一文字に慰められるのは、その知らせが、故郷の土のにおい、潮風、秋の訪れの光の変化を伝えていくからであらうか。

筆者略歴

東京都立大学・首都大学東京教授、オックスフォード大学英文科招聘研究員・ユニヴァーシティコレッジ上級研究員を経て、今年三月、立教大学文学部教授を定年退職。現在、関西外国語大学教授。言語文化学博士（大阪大学）

南海タイムスより転載



祖父が貰った東條英機からの表彰状

昭和二十七年 小宮山 肇

表彰事案の内容は、昭和十六年九月の大型台風接近で静岡県他の漁船が八丈島末吉の港沖に避難したが、激しい荒波で船団は座礁、沈没し、遭難者56名、死者12名を出す海難事故となり、これら遭難者を収容した事案であった。

その約1ヵ月後「御正台」(ニシヨウダイ)の岸壁の洞窟の奥から人の叫ぶ声を近くで操業していた漁船が聞いたことから、遭難者がいるのではないかと、この危険な救助作業を行なうことになった。しかしこの危険な救助作業に多くの人が命綱を付け、洞窟の奥へ入り、遭難者を救助した。祖父の話だと、その洞窟は通常は海面に隠れて見えないうちに入ると海面が下がり、洞窟が見える状態になる場所だった。中に入る奥は広い空間になっており、玉石が敷き詰められた平坦な広場になっていた。

遭難者は難破船から流れ着いた玉ねぎを食べ、生き延びていた。私も中学校、高校時代にこの洞窟のところで泳いだことがあるが、暗く不気味な場所だったことを覚えている。この事実を知る人は今は存在しないが、祖父の勇気ある行動は当時、話題になったそうだった。



この表彰状を交付したのは、財団法人警察協力会会長、「東條英機」で第二次世界大戦の陸軍大臣、内閣総理大臣を歴任、終戦後A級戦犯として処刑された。

当時の財団法人警察協力会は明治三十三年設立され、警察活動に協力、援助した者に対する顕彰を行なった。現在は「公益財団法人警察協会」として千代田区三番町に所在している。そして警察活動に協力、援助したために被害を受けた民間人、及び警察執行務に当たり災害を受けた警察職員並びにこれら遺族に対する救助活動を行なっている。一九五五年(平成七年)オウム真理教団テロで狙撃され、一命を取りとめた警察庁長官、国松孝次も当協会会長を務めている。



“酪農” ことはじめ：：気がつけば牛飼いの女房：：

小宮山万里子

古希を迎える私、自分を主語にして物語りたかったのですが裏方になってしまいました。フェミニストの方からは、今時“の妻” “の女房” なんて、とあきれられそうですが、人生一〇〇年と言われるご時世、まだ4分の1以上が残されていて、また違う物語が紡げるかもしれません。とりあえず人生の一区切りとして、裏方から見た “酪農” へ至った道を振り返ってみました。

まずはマクラから。約四十年前、八丈島へ。その時の連れ合いの職業はあかね花壇という園芸農家、だけでは収まらず、人から頼まれて始めた家庭教師の数が増え、あかね学習会なる塾を開きました。でも週2回2時間足らずの時間で教えても、思うように伸ばせない子がいると悩んでいたところに、たまたま出会った公文式学習、島の子にはこれだ！と直感し、公文に全面転換しました。当時の公文教室といえば女性が先生になるものだったので、連れ合いとともに私も教室の先生に。お百姓との兼業はできなくなりしました。

このまま行くかと思えたものの、公文の先生はやはり女性に適した仕事、そのせい（ほとんどそのせい）連れ合いはまたまた新たな道を求めて：：まあ男って人種は家事的な内の仕事には関心がうすく外向きのことをやりたがる。しかしこの “怒濤の四年” の後、次なる道までの日々は何となく無聊をかこち、傍目にもそう映ったのでしょうか、とんでもない相談が持ちかけられたのです。

ここからが本題。話は牛乳を生産してきたJA八丈島（農協）が工場を廃止した二〇〇七年にさかのぼります。

それは、2人の女性の訪問から始まりました。

牛乳工場が閉鎖されるのだけど、一緒に八丈牛乳を守っていかない？

どうやって？



まず私たちが資金を出し合い、賛同者をいっぱい募って。で、牛乳工場は誰がやるの？

それは、建さんしか……

エッ？お、俺っ！？

多少、戯画化していますが、まあ始まりなんてこんなもの。かくして、連れ合いの、還暦からの新事業・牛乳工場への挑戦は始まりました。直しても直しても、そこかしこが不具合を起こす牛乳工場の機械類と格闘しながらなんとか牛乳を生産し、しかし、募れども募れども酪農後継者は現れず。

牛乳工場を始めた直後から、このまま島の酪農が続くはずがないのに気づきました。何しろ酪農家はたった2人、しかも後継者なしの年配者。労働はきつく、稼ぎは厳しい。酪農家がいなくなれば、当然牛乳工場は継続できません。そこで近い未来の選択肢として4つの道が考えられました。

- 1 島外から後継者を募る：：でもこれはすでに見込みなしで、選択肢から除外。
- 2 今の酪農家が続く限り牛乳工場を継続する
- 3 自分で酪農を興す
- 4 区切りの良い時期に牛乳工場を閉鎖する（酪農家は切り捨てる）

数年後のそんなある日、島の図書館でたまたま出会ってしまったのです、岩手で牧場を営む中洞正（なかほらただし）氏の “黒い牛乳” という本に。

酪農はやっばり放牧が理想じゃない？

それに中洞さんの山地酪農方式なら未来がある。

島には冬場でも草があるしね。

これをお手本にし牧場建設をしよう。

牧場の始まりだってこんなもの、かくして、前期高齢者に手が届く年齢からの新事業・酪農への挑戦が始まりました。



八丈富士の東の麓、急峻な岩場を徐々に切り開き、雄の仔牛と、雌の仔牛を手に入れ、雄牛にユウタ、雌牛にユナと名付けました。中洞さんの“山地酪農”ならぬ、岩だらけの“岩地酪農”、この牧場を、天地創造における最初の男女“アダムとイブ”の物語になぞらえ、ユウタとユナの名前をとり、“ゆーゆー牧場”としました。

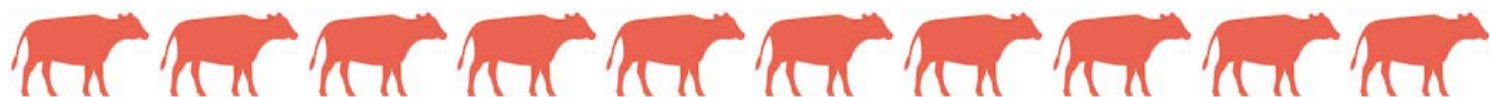
私たちは未来の選択肢の中から、2と3の併合をめざしました。つまり少しづつ放牧地を拡張しながら少しづつ牛を育て増やし、近い将来は島の酪農家といっしょに酪農を守り、牛乳を生産していく、という道です。しかしこの道は突然断ち切られました。すでに一軒になっていた酪農家が途中で廃業するしかなかったのです。

“私たちの選択”と書きましたが、この“私たち”の中には牛乳工場再建の時の賛同者は含まれていません。当たり前といえは当たり前、こんな夢のような放牧酪農を同じように夢見てくれる人がそうそういるわけありません。だから、酪農家が廃業する前に4の選択肢をしていけば、“ああ良く数年牛乳工場をがんばってくれた、お疲れ様”と言ってもらえたかもしれないませんが、ある日突然、“牛乳が生産できなくなりました、酪農家の牛がダメになりました”という2の選択肢の終わり方

だったので、“何やっているんだ、言ったこっちゃない”という非難の方が多かったように思います。

2と3の道を選び、すでに準備を進めていた私たちでしたが、強制的に第5の新たな選択、すなわち自ら牛を飼い、かつ牛乳を生産する、という道に踏み出さざるをえなくなりました。かくして、町とのお約束、夏休みからの学校給食牛乳供給を開始すべく、乳牛を買い入れ、牛の居場所を確保し、ド素人でありながら酪農事業を本格的に始めたのです。

しかし、その後の“苦闘”はまた長くなるので、次の機会をいただいた時に。



東海汽船 & ヴァンテアンクルーズが 三根会会員に特典！

橘丸の乗船券がオール10%引き

ヴァンテアンクルーズのセットプランが10～20%引き



東海汽船の乗船券
(定期航路、企画旅行、納涼船)
が10%引き

東海汽船株式会社

お問い合わせ：お客様センター（受付時間 毎日9:30～20:00）

電話 03-5472-9999 0570-005710

東京ヴァンテアンクルーズ株式会社

お問い合わせ：（受付時間 毎日9:00～20:00）

電話 03-3436-2121



八丈島には何時から人が住むようになったのでしょうか？

【遺跡について】

―伊豆諸島に人々が渡ったと言う考古学的証明としてはその最も古い事例で旧石器時代に神津島から本土に運ばれた黒曜石である。地質学的には洪積世紀最後のヴェルム氷河期（最盛期二万年前）のことだそう。その神津島産の黒曜石は伊豆半島・静岡県、関東地方の各文化遺跡から発見されている。今でも一部、神津島でとれるそうだからか。

当初、御蔵島以北の伊豆の島々では縄文、弥生時代の各文化遺跡が確認されたが、八丈島ではまだ、発見されずその当時としての見方では先史文化は御蔵島までとされてきたそう。黒潮本流を超えた八丈島には石器時代という古い時代には直接本土との交渉はなく、石器時代住民もいなかったというのが当時の考えであった。

―ところが昭和三十七年に八丈島の檜立地区の温泉ホテルで古代遺跡が発見され、二年後昭和三十九年に専門家が調査を始めたところ多くの土器、石器が見つかった。八丈島でもこの石器時代に人が住んでいたのだ。

○湯浜遺跡（八丈島誌より）

―発見された遺物は土器片86片（6個体分）、打製石斧1点、磨製石斧2点、石皿2点、すり石など7点、台石1点、剥片および破片焼く500点（内黒曜石14点）など。

しかし、八丈島の遺跡の特徴は他のところでは見られないような異なった土器や斧が多くあったらしい。本土から渡って来たもの以外に黒潮に乗って南方諸島や黒潮の流れる地域からの渡来でもあったかもしれない、とのことだ。

☆「東京都八丈島湯浜の石器時代遺跡」（考古学刊第3巻4号）杉原壮介・戸沢充則

＊湯浜遺跡は、遺跡の所在する八丈島の占める位置からみても、日本内地や北部伊豆諸島とは地理的にもかなりかけ離れた位置にある。

＊その立地は地形的に見ても、また累積する多量の火山性堆積物から言っても、生活立地としてはかなり不安定なものである。

＊遺跡の規模は小さく、また発見される遺物の量も多くない。文化層も単一であることから考えて、長期間の移住は考えられない。しかし竪穴住居を構築し、そこで石器を製作したことが明らかであるから、一定期間の定住は行っている。

＊土器・石器の特徴は、ほぼ同年代に比定される内地の縄文時代前期の様相とは著しく異なっている。

＊石器の機能などから推測されることは、それらの労働用具は極めて単純な対象（例えば丸木舟の製作と言ったような）だけのために用意され、狩猟や漁撈以上に植物採集が主な生業であったかもしれない。

―専門家の推測として

＊磨製石斧・黒曜石剥片・石皿の存在から考えて、日本の縄文文化との関連は深いものとみる。一部の打製石斧は一時的に出現した、その生活との直接の必要上から生まれたもので、特異な土器も島産という事情が生み出した特殊性である。

＊湯浜遺跡の遺物の諸様相が縄文文化に比べてかなり変容しているのは、それが内地からの直接の波及ではなく他の伊豆諸島にいったん定着した物の再波及であるかもしれない。

＊逆に湯浜遺跡の石器文化は、縄文文化とは何ら直接の関係はなく、より南方諸島、あるいは黒潮の流れる地域からの渡来である可能性も強い。

―その後、昭和五十二年に同じ温泉ホテルの一角で再び遺跡が発見された。

○倉輪遺跡（八丈島誌より）

―ここでは住居跡、埋葬人骨なども発見された。土器・石器、骨角製品の他にも子犬の歯や装身具なども発見された。このことから犬も一緒に生活していたことやまた、装飾品については他では類例を見ないものであったらしい。

＊遺構

住居跡2軒、竪穴状遺構1基、土坑4基、炉跡5基、灰層一か所、集石状遺構人骨3体。

＊遺物

・土器および土製品は縄文時代の前期から中期の初頭の遺物が多く見られる。

・石器は打製石斧・磨製石斧、石銚、石臼、砥石、剥片石器、装飾品類の多岐にわたるが装飾品類には目を見張るものが多い。

・骨角製品は釣針の出土品が12点もあり、目立っている。多くはイノシシの下顎犬歯が利用されている。カ物遺存体としては魚類のうちサメ類の歯が分析から50個検出されており、サメ類がかなり多く捕獲されていることがうなずかれる。

―これらの遺跡発見で間違いなくこの縄文時代から八丈島でも住民が生活を営んでいたことがハッキリしたことになる。しかし、何故住む場所がここだったのだろうか？切り立った崖の上だ。・・・この時代、島の他の地域には誰も住んでいなかったのだろうか。それとも八丈島の何処かにまだ、遺跡が埋まっているのだろうか。

情け島

今年は御世が代わり、新元号となる第一回目の三根会です。昭和、平成、新元号。会長始め、役員の方々、各学年の幹事が「縁の下力持ち」となり、長い年月を牽引、運営して頂いていることに感謝致します。私は新宿、品川、東京プリンス、中野、その四度の出席しかありません。それなので寄稿する立場ではないのですが・・・。テーマに迷った挙句、八丈島の代名詞でもある「流人」「情け島」というワードが浮かびました。三根会の会場に入るとそこには八丈島があります。暖かい八丈の空気があり、温かい人情があるのです。

昭和41年春、大切な人達に別れを告げ、18歳で上京しました。あれから50余年。いつの間にか71歳になりました。亡き母がよく言っていた言葉があります。「くには生き馬の目を抜く」上京して間もなく「ああ、来なければよかった！」と思い、ストレスで円形脱毛症となり帽子を編んだのも遠い昔の思い出です。行き交う人々は温かい目なざしを持った島の人たちとは別の人間に思えました。島では、家から出ると「どこへ行く？」と声をかけてくれる顔見知りばかり。くには母の言う通りの世界でした。

物の本によると、流罪となった宇喜多秀家は、息子や家臣十数名を連れ八丈島へ流されました。亡くなるまでの50年間島の人たちに慕われ、温かくもてなされたそうです。八丈島が「情け島」と言われる所以です。小説にも書かれました。難破した船の乗組員を助け、青ヶ島から八丈島を径て、手厚く保護され送り届けられた実話を元にした小説です。また、だいぶ以前のことだと思いますが、自分達のご先祖が八丈島民に助けられ、近年になり和歌山県と友好関係が結ばれた。これらのことは全て島民の温情ある人間性を称賛するものだと思います。この行為は今でも脈々と受け継がれています。自分の姉も登校拒否だった生徒を預かり、里親となり社会へ送り出しました。実母よりも強く、深く関係は現在も続いています。岡山在住の姪も、岡山城主だった秀家の父との関わりなどから、岡山と八丈の友好に尽力しています。

今では島に帰ることも少なくなりましたが、飛行機から見る八丈富士は「情け島」を象徴し、畏怖堂々としています。暖流、黒潮のおかげでしょうか。

34年度 長沢 明美

クジラの出現

2018年のある春の日の出来事。八丈島の西海岸。暖かい日差しの下で散歩していた時のことだ。南原の遊歩道で、岩場の先の海原に目を移した時、一瞬、海面が爆発したように白波が高く舞い上がった。以前、八丈の周りの海の出来事で、八丈の南の明神礁で海底爆発が度々あったのを記憶している。まさか八丈の海底でも、と思ったがそんなことは、あるはずもない。その数秒後に謎は解けた。黒い巨体の一部が水面に姿を見せたのだ。そう、これはクジラだ！ここ数年、八丈の南でクジラの出現の話はよく聞いていた。初めて見るクジラだ。その後も何度も波しぶきを噴き上げ、黒い背中を見せ、南の方へ悠然と航行している。行く先はどこへ向かっているのか？しばらくその姿を追って眺めていた。小さくなるまで・・・。その後、通りすぎる人たちとは、「クジラ見ました？」「見た見た」「びっくりどうじゃ」「すげえじゃー」とか。

この時期、北から南へ旅するクジラたちにとって地球のこの広い海原は自分たちの庭みたいなものなのだろう。これからは南の海で子育てに忙しい時期だと聞いている。人間も船に乗って自由に行き交う海だがやはり、この広い海原はクジラたち、魚ファーストの領域なのだ。良い旅をクジラたち！

一地元八丈で最近聞いた話では、釣り船で魚があまり釣れなかった時などお客のリクエストに応じて釣りの帰りにクジラを追って見せるそうだ。八丈島でも近いうちに“クジラ見学ツアー”が出現するかもしれない。

編集部より

ワシントン広場の思い出

子供の頃遊んだワシントン広場について少し語りたいと思う。

場所は奥山次男商店から神港方面に向かう途中に今は亡き道徳町長宅がありその隣が空き地になっていてワシントン広場と呼ばれていた。現在は民家が数軒立ち並んで広場はありません。

ワシントン広場の由来や誰が名付けたかは不明である。

当時、ワシントン広場の夜は更けてという唄が流行っていたので自然に呼ぶようになったのではないかと想像する。

広場の奥の方には芝生が植わってるところがありその周りは松の木が生えてて手入れがよく施されていた。ワシントン広場が誰の土地か誰が管理してたかは定かではないが赤金、洋望、出廻りや他の地域の子供達の絶好の遊び場所だったことに違いないと思う。

私の記憶の中には同じ地域の先輩、後輩関係なく野球をやったり凧揚げやメンコ遊び、奥の芝生のところでは相撲や鬼ごっこをやった思い出の場所である。今は夏に帰省すると底土の花火を芝生があったくらいの場所から眺めるのが楽しみのひとつになっている。

周りの風景はすっかり変わってしまったが花火を眺めながらワシントン広場だったこと、遊んだことを思い出します。

今ではワシントン広場を目にすることも飛び回ることもしないがワシントン広場と聞いてかなりの人が懐かしいと思うし遊んだ記憶があるのではないだろうか。

東京在住 (T・A)

第37回八丈島三根会総会

12:00 三根会総会開催 (司会 幹事長 鈴木 茂)
会長挨拶 会長 峯元 信博
会計報告 会計 佐藤 千鶴代
会計監査報告 会計幹事 菊池 清明
来賓挨拶 八丈町町長 山下 泰也
来賓挨拶 八丈町議長 奥山 幸子
来賓挨拶 三根小学校校長 鈴木 勲
来賓挨拶 都議会議員 三宅 正彦
乾杯 名誉会長 小宮山 肇

<歓談>

13:30 懇親会 (司会 幹事 本荘 薫や)
八丈島の唄と踊りトーク 有志
太鼓大会 有志
恩師紹介
三根地区別紹介 (学年クラス紹介) 有志
懐かしのフォークダンス 有志全員
為朝風紹介
八丈島特産物抽選会

<歓談>

14:50 校歌斉唱 (全員) 会員有志
万歳三唱 顧問 太田 中

15:00 終了

三根小学校校歌

作詞 野口雨情
作曲 藤井清水

一、朝日はのぼり輝やきて

八丈富士の峰高く

仰ぐわれらの三根校

仰ぐわれらの三根校

二、剛健不撓の精神に

流れも強き黒潮の

沖ゆくごとく進みなん

沖ゆくごとく進みなん

三、磯うつ浪の絶ゆるなく

朝に夕べにいそしみて

いざもろともに励みなん

いざもろともに励みなん

協賛

・東海汽船 株式会社
・八丈興発 株式会社

・東京ヴァンテアンクルーズ株式会社
・有限会社 坂下酒造

協力

・八丈町役場 ・八丈町立三根小学校 ・八丈町立富士中学校